

六波羅蜜寺（西光寺）創建期諸像について

東北大学 井上 大樹

六波羅蜜寺は応和年中（961～64）に空也上人が建立した西光寺の後身寺院である。現在寺に遺る十一面観音像、四天王像の内三体が創建当初の像とされ、空也の伝記『空也誄』によれば、天暦5年（951）に発願されたものと考えられる。近年、奥健夫氏により、四天王の内、持国天像が東寺講堂像の模刻像であるとされた。しかし、東寺像を模すことと西光寺の造像背景との関係や、四天王全体としては滋賀・善水寺像が最も近いという形制についての問題もある。本発表では、西光寺の造立事情を考察した上で、その関係について一案を提示したい。

西光寺の造像を、『空也誄』は「勸貴賤、唱知識、造金色一丈観音像一體・六尺梵王・尺帝・四天王像各一體」と記し、空也が率いる知識に檀越・貴族が出資した、仏教組織の結成を示している。その知識は念仏で結びつき、檀越として想定される藤原摂関家は、彼らに死霊の鎮送を期待した。そして西光寺の位置は、平安時代に念仏僧が陵の側に配されたように葬送の地・鳥戸野の入口であり、鳥戸野には仁明天皇女御藤原沢子の中尾陵が存在し、祟りも起こした。中尾陵は国忌対象陵であったが、天暦8年、朱雀・村上天皇母藤原穩子の崩御により、替わりに国忌が廃される。この背景には藤原基経流の人物が天皇家とのミウチ的血筋を示そうとする摂関家の思惑が指摘されており、天暦2年以降不豫を繰り返す穩子のため、檀越・摂関家は中尾陵を鎮める装置としての西光寺が必要となったものと考えられる。

東寺講堂像は『続日本後紀』に仁明天皇御願とされ、檀越には仁明天皇の像との認識があったと理解できる。すでに文化史等では承和年間（834～48）・仁明天皇が後代において依るべき規範とされたことが指摘されており、持国天像の関係もそこに帰するものと思われる。しかし空也の行状からは天台僧との関わりが知られ、善水寺は天台宗との近い関係が指摘されている。比叡山に遺るいくつかの天王像は図像等で六波羅蜜寺像と通じ、西光寺への比叡山の関与を無視できない。そこで、比叡山内に東寺講堂諸尊と同じく承和年間に仁明天皇が真言僧実恵と建立した、定心院に注目したい。定心院は十一面観音、梵釈四天王像を安置する点で西光寺と共通する。津田徹英氏は比叡山根本中堂薬師如来と同西塔釈迦堂釈迦如来が「初門釈迦印」の印相で両者が同体視され、天台系金色薬師坐像が生み出されたと指摘したが、定心院本尊丈六釈迦像も初門釈迦印であると想定され、現存六波羅蜜寺薬師如来坐像の印相と通じる。定心院は大般若経転読の場で、空也の知識による大般若経書写に通じ、応和3年の同経の供養会では釈迦の大般若経説法の会座になぞらえた設えがなされており、本尊としての釈迦の存在も想定される。定心院と西光寺の関係を、藤原沢子が仁明天皇に寵愛された人物だったということに加え、仁明天皇が当時倣うべき先例であったことに求めたい。